

ハルトマンの凝集理論

序

人間とは精神的存在である。⁽¹⁾すなわち四層の凝集体が精神であり、人間であり、⁽²⁾世界の全体である。人間は多様性の統一として四層の凝集体であり、世界の統一体である。なるほど世界は多様性を極めてはいるが、これが見事な統一を形成し、自然美の極限を構成していることは紛れもない事実である。世界は統一し、人間は統一ある構成体となっている。この統一せる事実の中に、ハルトマンは多様性の統一としての凝集を洞察する。

ヘーゲル・ハルトマンの精神解釈の差異がこの場合、両者の哲学的立場における基本的差異となっている。ハルトマンは精神を四層の統一体と考え、精神を純粋に他から分離したものとする考え方に反対する。他から分離して自己の優越性を保持し、これによって他を支配・命令し自己の下に統一しようとするのは、二元論に基づきながらこれを承認しようとしないう一元論的統一の考え方である。このために下から上へ、未完成から完成へと発展が志向され、現実よりは未来に完成

せる統一体が期待されることになる。ヘーゲル弁証法の根幹は実はここに根ざしている。

完成せる統一体は現実には事実として人間の目前に存在するために、ハルトマンは人間の認識能力を越えた超客体的・非合理的存在領域ここに設定する。完成せる統一体は認識範疇によってはその一部しか把握できず、それは依然として謎であり、従ってこの説明は限界がある。とはいえ、人間が多様性の統一体として現に存在していることは疑いのない事実である。ハルトマンの凝集理論がここから出発し、この謎に可能な限り接近しこの存在範疇の解明を意図するのは、形而上学の存在を予知せしめている。

ハルトマンの論文にはヘーゲル批判が数多くみられる。もちろん、ハルトマンが批判によって自己の立場を明確にし、自己の哲学的立場を確立しようとするものであることは当然である。ハルトマンに関するこれまでの私の論文⁽³⁾も、実はこの批判が否定的でなく、肯定的であることを主張せんがためにある。ここにまた凝集理論と題してこの論文を書く意図も、ハルトマンがヘーゲル弁証法批判と称しながら、弁

永 島 輝 雄

証法の正しい位置づけを企図しているのではないかという着想に存している。

ヘーゲル弁証法批判によって、弁証法そのものを危険な策謀として完全に放棄しようとするのか、それとも弁証法のもつ危険性を指摘しながら、その妥当限界内で弁証法をハルトマン哲学の重要な骨子として認めようとするのか、という点がハルトマン思想と弁証法の関係を考える場合重要である。あるいは両者の中間的立場も考えられようが、とにかくハルトマンが弁証法をどの程度認め、それを自己の哲学的思索の中に受容しているのが、本論文の主題である。

ハルトマン哲学の研究に際して、まず第一に着手しなければならぬのが範疇法則である。ハルトマン哲学の方法論はこの範疇法則に集約されている。そこで弁証法についての研究は範疇法則から始めなければならぬ。むしろ弁証法に新しい意義づけをし、それを正しく蘇生せしめるのが範疇法則の役割である。

本論文は範疇法則の研究によって弁証法概念規定を行う。余り多くを説明していないハルトマンの弁証法規定に対して、研究者がその補足解釈するのは極めて危険な事である。本論文はこの危険性の上に企画されている。私の着想に狂いのないことを祈るのみである。

一

ハルトマンはヘーゲル弁証法の偉大さが二律背反の発見にあるとして、ヘーゲルの学問的業績を一応は認めている。弁証法の本質は二律

背反にあるというのがハルトマンの本意である。しかしヘーゲル弁証法の誤謬を次のように指摘する。すなわちその二律背反は存在論的対立構造を指示するため、これを矛盾と解釈して、次元の高い綜合でこの矛盾が解決されるという点にある。ハルトマンも弁証法を二律背反による対立であると考えてことでヘーゲルと一致するが、この対立が矛盾であり、従って発展解決させねばならない非連続的対立であるとは考えていない。

ハルトマンはヘーゲル弁証法を概念弁証法 (Begriffsdialektik) と規定する。⁽⁵⁾つまりそれは概念においてのみ存在する弁証法であり、現実には存在しない、事実には即しない、人為的に構成されたものという意味を含む。人為的とは思弁的であることによって、垂直的思索の場において下から上へと発展する思弁的図式に価値構成されている。下から上へ価値志向する思索は観念論の本質を構成し、上による下の統一を最高価値として承認する。従って対立の場に非連続的分離があり、これによって存在優位がどちらかに与えられ、それに統一の使命が負わせられている。

下から上へと発展・完成する使命をもたないというのが、ハルトマンの不変な主張であるから、これをヘーゲルの垂直的 (vertikal) と比較して水平的 (horizontal) という。⁽³⁾対立が水平的であることによって両者に連続的移行があり、従って凝集に基づく統一がそこに存在する。形式論理で考える人は次のように反論するであろう。連続性が存在すれば対立も二律背反も発生しない。対立があればそこに非連続がある

ことになる。形式的には確かに承認できるが、しかし全くの非連続だけでは存在不可能である。反対に全くの連続だけでも対立関係は存在しない。対立は連続性と非連続性の共存によって成立している。むしろ連続的移行が非連続性を成立せしめる根拠になっていると考えるのが、弁証法の本質に近い思想といえる。

水平的とは連続的移行による同一視ではない。ハルトマンによれば同一視が統一とはならないから、水平的とは多の統一、すなわち凝集となる。それは非連続の連続であり、連続の非連続である。全くの同一視でもなければ全くの分離でもない、という解釈が対立の中に含む。従ってどちらも存在優位をもたない対等・同等関係に、水平的弁証法の特徴がある。そこでは支配・従属・上下・階級関係は存在しない。

多様性が共存・統一を保持し依存し合う。この相互依存関係には支配思想は含まれず、観念論的発想は認められない。

対立には依存関係があり、このため持ちつ持たれつの肯定的関係の中に否定的要素を包含する。ところが観念論的・唯物論的弁証法論者は対立を否定関係のみで考え、これを矛盾で表現するため、この解決を高次元に求めねばならない。この上昇・発展をヘーゲルは相互止揚で説明し、対立する両者が別の高い原理によって共に生かされる道を開示する。これは結局自己の原理にでなく、他の原理に服従するのが自由であると教えている。しかも他の原理が神の原理であれば、人間はただ神に服従・帰依するのが自由・幸福となる。観念論の本質はここに由来している。

人間が命令・支配しようとするれば戦争・不幸が続発し、反対に人間が神に服従・従属すれば平和・幸福が舞い込む。神に依存して幸福と教戒すれば、それは観念論であり、物に依存して自由と教導すれば、それは唯物論である。ハルトマンも依存して自由を範疇法則の重要な骨組とするが、依存・自由の概念規定に彼等と重大な相違がある。人間を神化して幸福を得るか、物化して自由を得るかという二者択一ではなく、人間を毀損することなく生かす第三の道に統一の場が発見できる。依存と自由とは支配・服従関係では成立しない。水平的共存の場で依存し合って相互が自由でなければならぬ。もちろんハルトマンは依存と自由の関係を横だけでなく、縦にも当てはめる。これによって水平的とは横の意味でなく、支配・服従関係に基づかないという意味であることが確定する。人間が神に服従すれば人間が自己の原理に従うという自由を喪失する。人間が動物化しても人間のもつ本来の喜びを見失う。人間の統一は人間の次元から発見されねばならない。

「いかに統一すべきか」ではなく、「いかに統一してあるか」から存在論は出発する。そのために哲学的体系要請から由来する価値思考の根を断ち切らねばならない。統一・調和に価値を認めるのは人間的要請である。しかしそのために人間存在を虚構の場に幽閉し、幸福という最高価値の幻影に陶醉させてしまう。一元論はこの統一要請によって発生し、二元論は対立の場でありながら依存関係を認識しないため、調和要請によって対立の一方を他方の上に置いてその統一を希求している。ヘーゲル弁証法の図式——正反合——も発展・上昇・完成

を願望する人間の価値要請と一致させた一つの人生観・幸福観に他ならない。ハルトマンはこの本質を擬人観に求めている。

世界と人間を同一視しないで、世界をあるがままに理解すれば、少なくとも四層の重なり合いがそこに洞察できる。これによって多様性と依存関係が保持されて、下から上への統一も上から下への統一も不可能となる。四層はそれぞれ他から独立しながら他と依存関係にある人間はこの独立した四層の統一体である。この在り方は分析的にある程度まで解明できよう。しかし範疇分析によって依存と独立関係をもつ四層の重なり合いが開示されても、さてこの四層が実際にどのような凝集しているのかという総合的面で不可解な点が無限に残る。

ここにおいてこの統一的事実に対して不可認識領域を承認せずにはいられない。ヘーゲル弁証法は絶対的能力の立場から、この超客体的存在領域へ侵入しこれを合理化する誤りを犯している。すなわち人間の認識に関係なく、現象自体に四層の統一した凝集が作用している。この現象の背後に作用する範疇がいかなるものであるかを分析的に指摘すれば、四つの原理であるとしかいいえない。これを一つの発展的原理で説明すれば、世界の多様化の事実を目をおおってしまうことになる。結局、論理的に把握できない凝集の事実を、経験・記述・分析・概念構成を常套手段とする普遍化に依存せざるをえない。しかしこの場合普遍化の限界を正しく識別し、世界を合理化するその妥当範囲は、認識論的に客体化可能領域である。この見地に立ってハルトマンが凝集法則を作成したのは、客体化の限界内である。ところがこの普遍化が

無限に拡大・発展して、理性と世界が完全に一致すると考えるのが観念論の錯誤である。従って世界における凝集・統一を、人間の認識能力の可能な範囲で分析・法則化するのには、範疇分析に与えられた使命である。

二

ハルトマンは弁証法規定を範疇的凝集に求めている。⁽⁸⁾そこでハルトマンの弁証法概念規定は凝集法則の検討から始めなければならない。凝集法則は現象決定の原理が一つではなく、多様の統一であることを示す。すなわち結合の法則において、多様な原理が結合・決定する範疇の在り方を明確にし、層統一の法則では、多様な原理が統一して決定をなし、決して分離して他と無関係に決定するのではないことを指摘する。従って属全体性の法則では、他と無関係な多様な決定によって後から統一が発生するのではなく、統一がまず在ってこれによって多様な決定様式が結合・凝集することを補足説明している。しかしこの統一性は優越的・支配的でなく水平的である。包含法則が凝集法則の最後に存在し、各個が他を包含しながら全体を代表し、含み含まれつの包含関係の中で対等性を保有すると総括している。

各個が全体を代表し合えば、その多様性が喪失し、同質性のみが存在することになる。もし包含法則がそのために役立つ法則であるならば、同一視こそ統一という一元論的発想に帰着する。包含法則は統一の支配体を単独体に求めないための制限として存在している。弁証法の一つの規定——水平的——がこの包含関係に妥当する。従って水平

的とは確かに横の関係を表現していることになる。⁽⁹⁾

包含関係とは具体的にいえば、連続性による相互移行である。対立に相互包含・相互移行を認めないのがヘーゲル弁証法の特質である。矛盾の発生は相互移行によつては絶対に不可能である。そこで垂直的に上へと発展する連続性を求め、高次元の場へ止揚して包含関係を成立させる。しかしハルトマンは水平的次元に連続性を認識し、そこに対立関係としての非連続を発見する。多の統一を遡源すれば、その第一の意味はここに存する。連続性のみを一面的に強調しないでその反対の極——非連続性——を熟視するのが、弁証法理解にとつて一番重要な鍵である。従つて他なしに自己があるという絶対の独立性を求めるのでなく、他があつて自己があるという自己限定・自己制約に自己の独立性を求める。この関係は各個に存在するために、ハルトマンはこれを相互限定(Wechselbestimmung)・相互制約(Wechselbedingung)という。

水平的とは、支配・従属関係の否定として連続性の要請である。対立はこの連続性によつて相互包含が可能となるが、これを一面的に理解すると、対立を非連続性で理解する矛盾の考え方と同一の誤謬に陥る。従つてハルトマンは正しい弁証法的関係を対立包含(Gegensatzimplikation)と規定する。すなわち対立と包含の共存が可能とならねばならない。⁽¹⁰⁾このように水平的規定の中に共存の概念を附加するのは、対立が分離関係ではないことの証明のためである。しかし決して分離性を否定しているわけではない。相互移行をそのまま一義的に理

解して非連続性を否定すれば、これも危険な論理といわざるをえない。連続性の表現は同質性の主張ではない。相互依存・相互限定の意味から個別性の保存とならねばならない。なるほど、哲学的体系の要請から普遍性の原理が探求されるが、これは同時に個別性の原理が尊重されるべきことの保証でもある。形而上学は普遍性の彼方に存するものでなく、特殊なものの根底に存する個別性にその存在根拠をもっている。ここにおいて哲学的に重要でありながら等閑にふされている古い問題——全体と個の関係——が真剣に取り扱われねばならない。

古くて新しい問題——全体が先きか、個が先きか——に對してハルトマンは層全体性の法則において、個の和によつて発生するのではなく、それに先立つて存在しているという意味で Prius(先きなるもの)の語を使用する。この場合全体が先きで個が後と一義的に解釈すれば、それはまた問題である。すなわち全体が個を発生せしめると考えれば、全体と個の関係は支配・従属関係となる。このように Priusは全体に分離性を認め、統一の使命をもつ優越性を与えているような表現ではあるが、実は水平的解釈によれば、全体も個も相互依存でありながら、個の統一に全体の存在意義があり、従つて個の統一なくしては全体の存在はありえないことになる。しかし全体は個の和によつて後から発生するものではない。それではどうして全体が先きにあるのかが疑問となる。⁽¹¹⁾これは永遠に解明できない謎である。

全体の解釈が統一・凝集に關与し、この在り方をめぐつて問題は紛糾する。全体を分離しても同一視しても、全体と個の水平的在り方が

失われる。ハルトマンは個の相互包含による統一を包含法則によって定義するが、これだけを一義的に主張すると同一視の踏襲となる。また層全体性の法則だけを単独に主張すれば、分離の解釈になる。そこで両法則は、補足・限定し合って、統一の本来の意義を保持するものと考えられる。確かにハルトマンは弁証法の本質を凝集に求め、これを包含関係に特質づけている。ヘーゲル弁証法に欠如している相互包含が、ハルトマン弁証法の一つの特質として挙げられているが、同時にヘーゲル弁証法に認められる対立性を失っては、それは弁証法ではない。すなわち弁証法とは、分離でも同一視でもあるという共存の在り方を代表するものである。

二律背反は弁証法の生命である。従ってこの対立的緊張関係の中に包含関係を認めるのが、ハルトマンの共存思考となる。対立と包含は分離して思考すべきでなく、両者は補足・限定し合って両者のもつ本来の意義を保持するものである。従って弁証法の二律背反だけにその生命を認めるのは真理の半面を全体と解釈する誤謬に陥る。真理の他の半面は統一にあることはいうまでもない。この二点でヘーゲルとハルトマンを比較すれば、その弁証法的規定に差異は認められない。ただし統一と対立の内容的解釈——統一をどこに求め、対立をどのような説明するのか——によって、両者の弁証法が全く隔離してくる。

二律背反に解決がない⁽¹²⁾というのがハルトマンの主張である。これは決して学問的努力を阻喪せしめる条件とはならない。かえってこれのために形而上学の成立が可能となり、相互包含の基盤が完成し、共存

という統一の場をもつことができる。解決がないことは解決の努力をしても無意味であるというのではない。解決に限界があることを示唆しているに過ぎない。この限界設定こそ共存可能の唯一絶対の条件である。すべての解釈に限界があるからこそ、これまでの主張のように対立と統一⁽¹³⁾は補足・限定し合わなければならない。

三

弁証法の重要な成立基準である対立について、ヘーゲルとハルトマンの相違を明確にしたい。ハルトマンは対立を、反対対立 (konträre Gegensätze) と矛盾対立⁽¹³⁾ (kontradiktorische Gegensätze) に区別する。この場合の反対と矛盾の語義は前者が「どちらか」であるのに対して、後者は「どちらか」になる。反対には共存・統一・共属が含まれ、従ってその間には移行があり、明らかに矛盾とはその意味を異にする。矛盾は止揚・綜合・発展の価値構造をもつ思想世界にのみ属し、実在世界には存していない。

矛盾が解決し統一すると考えるのは認識範疇の領域であり、これとは別に実在領域では解決のできない、機械的・力学的衝突、心的生活の葛藤、歴史における絶えることのない闘争が存在する。ヘーゲルはこれを矛盾対立と把握し、一切が解決し統一すると解釈する。しかしそれは思想領域における人為的構成であり、実在そのものではない。なるほど部分的に解決されるものもあるが、これを全体的解決と取り違えると限界無視の誤謬に陥る。大切なことは解決されうるものとさ

れないものとの区別、すなわち両者の限界を明確にすることである。

学問の体系的普遍化を目的として、絶対的認識能力過信に基づき認識範疇を拡大する危険は、ハルトマンの充分に警告するところである。自己の認識能力に批判的であれば、決して限界無視の誤謬は犯すはずがない。しかし本来、学問は普遍化を目的とし、矛盾律に基づき学問の体系化を意図するものであることはいうまでもない。学問の普遍化にこそ限界があり、これを無限に拡大・発展させる人間過信に観念論の重大な欠陥がある。真理は認識範疇になく存在範疇にある。そこで存在範疇を把握することの限界を自覚しないで、かえって普遍化に自己の学問的根拠を要請すれば、認識範疇を真理とする誤謬を犯すことになる。自己の認識能力に限界づけができれば、認識範疇と存在範疇の部分的一致にのみ、学問の普遍化の可能的限界を見出すはずである。観念論は、認識範疇と存在範疇が完全に一致するという見地を基本に、人為的構成によって世界を擬人化し、下から上へと発展・上昇する目的志向に世界の統一を企図している。従って認識範疇においては世界は統一・調和して考えられるが、存在範疇において世界を洞見すれば、それは不調和・不統一であり、絶えることのない闘争の連続である。ハルトマンはこの抗争の中に解決のない二律背反を洞察する。⁽⁴⁾しかしそれは単なる排他・分裂・分離関係でなく、共属・移行関係にあることを明示する。前者のみに重点を置いて世界を考察するために、世界を目的論的に上から調和構成をしなければならなくなる。前者は後者を予想し、相互に他のものの中に存し、相互に他なしには現われ

ない関係が實在領域に存在している。

ハルトマンはこの対立関係を存在対立(Seinsgegensätze)として総括する。対立は反対なものの共存として補足・並存関係にある。例えば山と谷のような関係で、これは矛盾でも激しい抗争でもなく、肯定的包含関係の中に相互の差別性を保持している。この存在対立から抗争関係——二律背反——が認識できる。その根拠は存在対立の中に存し、一切が存在対立構造によって理解せられることになる。しかし實在世界の抗争がすべて存在対立関係として解決せられてあるというのではない。存在対立を解決の図式として人為的に利用することはハルトマンの真意に反している。克服せられない抗争を残すこと、例えば二律背反は永遠に解決できないものとして、そのままに放置しなければならない。世界をすべて合理化することに哲学の価値があるのでなく、むしろ非合理的要素を認めこれに人間的要素を附加しないことが哲学の使命である。

合理的思考によって矛盾を排し世界を普遍化・体系化することは、我々に与えられた学問的要請である。ハルトマンもこの普遍化によって哲学的論理が展開していることはいうまでもない。しかし除外され、排斥されねばならないものが、實在世界に存在することを彼は認めない。「ある」とは単に孤立して単独にあるのではなく、他との関係で「ある」といえる。ハルトマンの最も嫌悪するところは、他より分離して存在し、自己の優越性を維持して、これによって他を支配しよう⁽⁵⁾と企図することである。ハルトマンの弁証法的規定——水平的——の

真義はここに存する。従って対立が否定的であるか、肯定的であるかではなく、否定的でも肯定的でもあるという共存思考がそこに存している。

どちらかの思考様式には、二者択一として切り捨てるべき要素をもつ。これは対立包含の本質に相互依存があることを認識していない。自己の本質が他に含まれ、他の本質が自己に含まれていることは、他なしには自己はなく、自己なしには他はないという相互連帯性の指示である。これが相互性 (Gegenseitigkeit)・共同体 (Gemeinschaft) といわれ、相互制約・相互限定の意味に他ならない。換言すれば相互依存である。対立とはこの相互依存と相互独立の関係で成立するものである。

依存と独立が対立関係にあり、相互に他なしには考えられない相互性をもっている。これまで凝集を対立包含で説明してきたが、この基本は相互依存関係にある。矛盾にこの依存関係を認識しないで、独立性のみを一方的に誇張するために、二つの定立が平行関係を保持して交叉しないことになる。そこで矛盾律に基づいてどちらかを切り捨てなければ解決とはならない。もちろんヘーゲルは高次元で両者が止揚し、共存の形で解決する弁証法的図式を素描している。解決の形式をとる共存は、対立ではなく調和そして統一である。この統一がまた分裂の契機を含むものであることは、ヘーゲル弁証法の有名な教訓である。

ヘーゲルの希求する発展の弁証法であるためには、あくまで定立・

反定立は独立性のみあって依存関係にないことが必要である。この相反する二つの定立が統一・調和するのは、高次元に依属する法則に服従することによってである。従って低次元で対立する二つの法則はそこで切り捨てられている。このように下部構造の切り捨てによって、上部構造からの下部構造の支配が完成し、下から上へと発展・上昇しなければならぬ目的を、存在度の低い下部構造に負わせられることになる。ハルトマンによれば、下と上の関係に依存と独立が把握されている⁽¹⁵⁾。そこで四層の基底にあってその基本的在り方を決定する、基礎的範疇について次に考察してみたい。

四

基礎的範疇とは四層のもつ原理の原理として、実在世界を統一する役割を保持する。四層それぞれの凝集は、その基底を基礎的範疇の中に普遍的にもっている。従って四層各層の範疇的在り方に個別性はあっても、普遍的・基本的在り方は最下層から決定される。この意味で原理を決定する原理としての基礎的範疇が、再現の法則に認められる再現力の中で最大の貫通力をもち、あらゆる層を貫いて再現するために、この基礎的範疇を研究することは凝集の普遍的構造を把握するのに重大な鍵となる。

これまで凝集を対立包含として水平的に思考してきた。この基本構造は基礎的範疇の一つの様式、要素的対立に認められる。これはすでに存在対立として説明しているが、これを細別すれば十二の対立に分

類される。しかもこれらの基本的理解は、範疇法則に認められる依存と独立によるものであることは従来論じてきた通りである。ハルトマンによれば、この対立は範疇相互の横の結合である。⁽¹⁹⁾確かに対立包含の一つの規定、連続的移行は横の関係としてのみ理解できる。しかしこの移行は同時に分離を予想するものでなければならぬ。もしそうでなければ依存と独立関係は破棄され、相互移行は連続性の強調のみとなる。相互移行は相互予想を可能にするが、これは同質性に基づくのではなく、かえって差別性に根拠を置くものである。

基礎的範疇の貫通力は各範疇の横の結合にのみ妥当するのであるが、これは本論文の生死にかかわる重要な論点となる。ハルトマンが範疇法則で説明する範疇層の重なり合いは、従来の哲学に認められない新しい考え方を代表するものであり、この点にハルトマンの漸新な独創性を知ることができる。ヘーゲルと比較・対照してハルトマンの批判的立場が確立できるのは、この重なり合いにある。ヘーゲルにはこの上下の重なり合いがなく、下と分離する全く新しい次元が上に高くそびえている。ハルトマンの共存とは結局この重なり合いであり、これは純だけでなく横にも妥当する理論である。依存と独立が部分的一致すなわち重なり合いで理解されれば、相互の個性も尊重され、包含による共同体も成立することができる。

基礎的範疇の対立はこの重なり合いに基づく。横の凝集を図式に表現するのは困難であるが、しかし理解に最も妥当なものといえは重なり合いである。もしこれを完全な一致で理解すれば、連続性・相互移

行の解釈には便宜ではあっても、それによって非連続性・対立性の存立は不可能となる。また反対に完全な不一致で理解すれば、対立は解釈できても移行が不可能となる。そこで共存の図式といえば、部分的一致すなわち重なり合いとなる。

部分的一致によってこそ、中間的要素を媒介とする移行が可能となる。この場合の第三者である中間的要素とは一致する部分的要素ということになる。また反対に部分的不一致によってこそ、対立・差別性が問題とせられる。この図式理解は空間的配置によるものであり、形式論理学の矛盾律を一応満足させた上で矛盾の承認を迫る様式になっている。つまり分離は対立であり、一致は統一である。この承認の上で分離と一致に制限を与え、それらを部分領域に局限している。

依存と独立を理解する上では、この図式は妥当な様式ではあるが、部分の多様性がどのように統一にもたらされるかに論及すれば、その説明は不可能となる。従ってそのまゝ実在的事実として承認を求めるより他にない。横の結合を説明するにあたって直観的理解に求めねばならないのは、多様性の統一として把握しようとするからである。自然的実在的のどのように多が統一してあるかは人間に未知である——これこそが弁証法的事実なのである——が、矛盾律に基づく普遍的解釈においては、部分的一致が最も妥当な図式と考えられる。しかしこれをそのまま実在様式と理解すればもちろん誤認となる。

対立は相反するものの間に存立するものではなく、多様的關係の中に成立するものである。重なり合いが多様性を構成し、これが対立を

成立させ、さらに対立包含の形式で統一に凝集していることの把握が弁証法的理解である。現象分析とは統一の中に多を発見し記述することであり、問題分析とは統一を多の原理に分析することであり、解決の試みとは多の原理から統一を再構成し普遍化することである。統一を分析しそこに多の原理を再構成しても、これが生命ある實在そのものでないことは明白である。この事實は概念化・普遍化できないものである。この實在的統一の事實に基づいて概念化できないものを概念化する努力は、矛盾律のもたらす宿命である。そこにおのずから限界があることがこれによって明瞭となろう。

対立を否定的にのみ考察すれば多の対立は理解できないが、対立を否定的にも肯定的にも考察すれば多は対立すべきものとなる。多様な現象に觀察される多様な原理の凝集は、対立包含として謎に満ちた形而上学的事実である。人間にとってこの事實は一次的現象であり、二次的には、この現象を分析して先験的に多の原理を抽出する仕事が範疇分析となる。従って凝集を分析してこれが横の結合であるか、それとも縦をも含むものであるかの分析は、人間の認識能力を超越するものである。¹⁷⁾しかし人間とは四層の凝集ではないのかという点で、凝集を横だけに限定するのは疑問を感じる。この点を再現の法則・依存法則によってさらに説明してみたい。

五

垂直的關係にも包含が見られる。ただし相互的包含でなく、一方的

でしかも制限的包含である。再現とは下から上であって、上から下へではない。上から下へ再現しないことは、下からの目的論的發展思想を断念させること、すなわち下が上に依存しないで自ら独立して存在できるという層独立性の法則に関連する。下は上に支配されもしないし、服従もしないという独立性が保持できるのは、一方的再現によって保証されている。このように垂直關係で下の独立性を保持するのは、上が下に包含されない条件によって、下は自らの原理に服従して自己を決定するという自由を可能にする。

一方的再現は下の独立性を保持するだけでなく、上の新規性を保護することになる。すなわち上が下から連続的に支配されないように、一方的再現に限界を付与している。変化の法則・新規なもの法則・層距離の法則が「一方的」を制限する。ハルマントによれば上は下に依存するから、上は弱く下は強い。このまゝに理解すれば唯物論の完成となり、上は依存のみあって自己決定する自由も独立もない。そこで一方的再現は限界づけが行なわれて、変化し弱められて下は上の単なる質料に過ぎないことになる。上の独立が保有できるのは、新規なものが下から分離して存在し、下から再現する質料を自由に形成・構築する自由が上に確保されているからである。

一方的再現は下から上への連続性の承認ではあるが、これが正しく可能となるためには非連続性の成立が必要である。非連続性の保証すなわち上下分離の証明として、層距離の法則がある。層距離は上下を分離して上の自由を保持し、一方的再現を制限するために存在してい

る。このように上は下からの再現に依存しながら、下を質料とする上部形成力に自らの独立と自由を保持する。下は上から依存され強くて独立、しかも上の自由を侵犯しないという制限の上に自己の自由を確立している。上が自由であれば下も自由、下の独立を承認すれば上の独立性も確保されるというのが、共存の意義であり、正しい水平的意味である。

相互移行は横の結合を構成して、各要素の水平的関係を確立する。

そこでの制限づけは相互限定・相互制約である。ところが縦の結合では相互の越境侵犯を防止する制限が特に付加されている。すなわち上から下への越境制限は下が強く上が弱いことによって、また下から上の越境制限は下から再現するものが質料で、上はそれを自由に形成する力をもつことによって、各層に依属する範疇に服従する自由がそれぞれ保有できる。範疇法則の重要な力点は垂直関係における依存と独立に置かれ、各層のもつ自由が他の領域を侵害しないように擁護されている点にある。

上の優越性は下を支配・決定することではなく、下に見られない存在の豊富さをもつことにある。この豊富さは、下からの再現が各層の凝集をすべて上に持ち運ぶことによって、従って上に来集する凝集物によって、下の予想が可能となる。しかし再現は変化し弱められて上に運ばれるため、下にあるものがそっくりそのままの形で持ち上がってくるわけではない。従って予想はある程度制限されてくる。このことは、各層の凝集を上へ再現して持ち運ぶため、逆に上から下

へどこへでも、ある程度ではあるが、関連していることになる。⁽¹⁸⁾

予想は上から下へであって、下から上へではない。この一方的予想において上の優越性が保持されるが、これは決して下を支配する観念論的根拠とはならない。擬人観の成立根拠は人間が世界を表現し、人間と世界が完全に一致することにある。確かに四層の凝集体である人間は世界を包含してはいるが、世界の本質を再現してはいない。質料としての世界を人間の精神が自由形成しているに過ぎない。従って横に存する包含形態は縦において相違していることになる。

縦においては、相互移行・相互予想・相互包含が不可能となり、質の相違する一方的移行・予想・包含が可能となっている。もし縦においてそれらが一方的でないとなると、相互侵犯が発生し、観念論・唯物論の乱立横行となるのは歴史の証明するところである。すなわち一方を承認するのは他方を不承認とすることである。こうして一方を制限し他方を自由にし、逆に一方を自由にし他方を制限する様式で、相互に制限し合う関係によって相互の自由と独立を保護することが、依存と独立の保証となり、横に見られる対立包含が別な形態をとって縦にも現出することになる。

縦には階層が存在し、単純なものと複雑なもの、要素的なものと豊富なものの対立が形成している。従ってこれを水平的に是正するためには双方に厳しい制限を付与しなければならない。ハルトマンの使用する低次・高次の表現は、上下の階級観念から離れて水平的に双方が並存する意味を内包している。

下からの再現は各層において同一ではない。überformen は連続的再現であるが、überbauen は非連続を含める再現として不均衡的対立を表現している。従って自由の意味が上下において同質ではない。すなわち上は上部形成の自由であり、下は独立の自由である。上層程、依存の度が大きくて弱くなるが、同時に上部形成の自由は大となる。下層になる程、依存の度は小さくて強くなるが、それだけ上部形成の自由は小となる。このように上昇するにつれて自由は無限に拡大する。これは上の優越性の指示であり、存在の豊富さの明示である。

不均衡的対立こそ多様性の意味であり、相互の自由を侵犯し合わないこれらの共存が統一の意義である。依存と独立は共存の基本原則であり、また自由を保持するための必要条件でもある。自由を独立性のみに求めるのではなく、依存の理解によって自己の独立を高めるのであれば、それは弁証法的自由であるといえる。横の結合では多様性の統一として対立意識が曖昧であるが、縦の結合において階層的にその多様の対立を意識し、存在論的自由は依存と独立であると明確に認識することになる。この関係をさらに妥当法則について考えてみたい。

六

観念論的哲学者は原理を現象から分離させて、原理のもつ決定力を強力なものにしようと思図する。しかしハルトマンは原理の在り方にも依存と独立の様式を洞察する。原理は決定し具体的なものは服従する。この関係のみを考えれば原理は独立で、具体的なものは依存する

ことになる。しかし原理は具体的なものを決定してそれはあるのであって、決定する具体的なものなしにはそれはない。原理は具体的なものに依存している。また具体的なものは原理に依存しながら、自己の原理を自己に含んでいる限り独立である。層依属の法則はその層が自己に依属する範疇によって決定される限り、その具体的層は独立であると教える⁽¹⁹⁾。上と下からの越境は他の層の独立を奪うものであることはこれによって明瞭となる。

層妥当の法則によれば、具体的なものは原理に抵抗することができない。ただ服従するのみで、具体的なものは原理から独立する自由は全くありえない。しかも層決定の法則によって、具体的なものの全体が残りなく完全に決定されてしまうがために、原理の力の絶対性を認識しこそすれ、原理から離脱する自由もそれを変改する自由もないことが解る。具体的なものに残される独立性とは層依属の法則によって、その層に依属する原理のみが有効であることに存するため、原理に絶対的力があるからといって上から下まで一貫的に支配・決定する自由は原理にはない。原理は妥当の限界内で絶対的力をもつのであり、具体的層は自己に依属する原理にのみ絶対的服従となる。この意味で具体的層は自己に依属しない層に対して独立性をもつことになる。

原理は決定力をもつことによって、縦の構造における高次のもののもつ優越性を陵駕している。従って思想において最も危険なのは、優越性を根拠にして絶対的決定力を具備してしまうことにある。観念論・唯物論の中に、高次のものと低次のものの関係を原理と具体的な

のとの關係に置き換える誤謬が存している。越境侵犯の基礎に存するものは、原理の絶対的決定力を無制限なものと確信することである。

高次のものと原理とはその在り方——依存と独立——において同一であるが、その機能において両者は相違している。すなわち高次のものには下からの再現があるが、具体的なものから原理への再現はない。しかし原理から具体的なものへの再現は存在する。つまり原理は具体的現象と並ぶ独立世界を構成していないために、範疇分析は具体的なものに即して行なわれる。具体的なものに包含される原理を分析することが原理存在を予想せしめているからである。²⁰⁾

原理の再現は変化せず弱められず、そのまゝの力で具体的なものの規定・決定づける。しかも具体的なものの中に包含されて、そのものを全体的に支配・服従させてしまう。この連続的移行の決定力に権力者たちは憧憬し、これを自分のものにしたいと願望するのは無理はない。しかし人間は原理になることはできない。精神、人間の現象分析によって範疇の凝集を知るのみである。具体的なもの²¹⁾の分析は原理存在を予想させるし、原理存在は具体的なもの²²⁾の存在を予想させている。ここに相互予想が成立する。ただし前述によれば原理と具体的なものには相互包含はなく、一方的包含しかないことになっている。そこで一方的包含からは一方的予想しかできないことになり、従って原理が具体的なもの²³⁾を予想できないことになる。しかし原理の本質には依存と独立——二律背反——が含まれているがため、原理存在はそれに依属する具体的なもの²⁴⁾の存在を予想せしめ、逆に具体的なものも単独では

ありえないため、原理存在を予想せしめることになる。

原理と具体的なものは共存の在り方において、相互に他を予想せしめその本質を規制させている。しかし原理に絶対の力が付与されているから、両者は不均衡的対立を構成している。縦においては低次のものが高次のものに含まれて従属的役割を果すが、規定關係においては原理が具体的なものの中に含まれて、支配的・決定的役割を果す。このような絶対的力をもつ原理にも、具体的なものに依存して存在できるという限界設定がある。限界とは原理の依属する層に制限されるということ、この領域内で絶対的力が能動することになる。原理存在の本質に二律背反があり、原理と具体的なもの²⁵⁾の対立にも依存と独立がある。絶大な力をもつ原理と具体的なもの²⁶⁾の対立は上下的でなく、二律背反的対立によって水平的になっている。

相互包含は認識論的には承認できないが、存在論的には一方が他方の本質の中に含まれるものとして把握できる。原理はその本質の中に前提として具体的なもの²⁷⁾の存在を包含し、具体的なものは原理を自己の本質の中に存在条件として包含している。これが二律背反的存在理由である。共属・相互包含・相互性は二律背反の半面の真理を表現する。後の半面の真理は独立・対立に求められる。原理の決定力を限界づければ原理と具体的なもの²⁸⁾の対立的共存が可能となるが、もし限界づけがないと両者の共存が不可能となる。縦の關係では上下両方からの制限づけがあるが、原理と具体的なもの²⁹⁾の共存のためには、原理の決定力にのみ限界づけがあればよい。

依存性は対立包含として連続的移行の承認となる。連続性は量的に理解されるため、原理と具体的なものとの質的対立を連続性によって架橋するなど全く不可能となる。しかし一方が他方の本質に包含されている点から、質的対立を超越して移行があることになる。⁽²²⁾ 具体的なものから原理への連続的移行が特に理解不可能なのは、認識論的観点からである。この観点から比較的に理解可能なのは縦の関係であり、部分的一致という量的図式によって依存と独立の理解が効果的となる。しかし原理と具体的なものとの関係は量的図式によっては理解できない。そこでは部分的一致ではなく完全一致となっている。そこでこれを存在論的観点から思考してみれば、部分的一致という依存と独立関係に復帰することができる。さらに横の凝集理解においても、これを量的図解で表現するのは不可能で、やはり特別な理解様式が必要である。この存在論的理解様式を次に考察してみたい。

七

原理の探求は具体的現象から出発する。この方法をハルトマンは逆推理(Rückschluss)⁽²³⁾と名付け、先験的方法に立脚すると説明する。すなわち論理上後なる対象から論理上先きなる原理へと分析の上昇によって、原理と対象の関係を認識することである。具体的現象より先きに存在する原理(Priorität der Prinzipien)を予想し、これを求めて分析する。原理は上位にあって決定者であり、具体的なものは下位にあって被決定者である。従って具体的なものを決定づける原理存在を、

確実な認識的保証なしに存在可能な条件として仮定することになる。具体的なものは原理によってあり、原理は具体的なもののためにあるという存在理由は、あらゆる認識に先立って仮定せられており、この仮定なくしては逆推理も不可能となる。

これと同一の思考様式として、逆結合(Rückbindung)⁽²⁴⁾が弁証法的方法として存在する。先験的方法が垂直的・上昇的に原理と対象との区別に関わるのに対し、弁証法的方法は水平的・下降的に原理間の内的結合・関係・関連に関わる。これは範疇の機能的決定、すなわち体系統一の先在を予想・推理することである。例えば層全体性の法則・層統一の法則は、全体と統一のPrinsであることを証明し、また新規なものの法則は、質料に対する統一の役割が新規なもののPrinsであることを保証している。

この統一推理の思考様式は体系思考の実現・体系理念の構成である。これが範疇の内的本質に関与し、範疇相互の内的関連において連続性の創造(Kontinuität-Schaffen)⁽²⁵⁾・連続性の要求(Forderung der Kontinuität)となる。対立に依存性を求めて、共属性・相互性・対立包含が発見できるのも、実在世界に弁証法的機能が存在し、またそれを連続性の原理として要求・創造する認識範疇にも、弁証法的機能が存在するからである。弁証法的機能は人間の認識に関係なく実在世界に能動し、また認識範疇にも意識に関係なくその機能が生動していること⁽²⁷⁾になる。

先験的方法とは一方が決定者であり他方が被決定者であるという分

離關係で、原理を認識し静止的概念構成を行なうことである。學問一般はすべてこの方法によって真理を探究するが、哲學としては上位も下位もない水平的次元で、結合關係を概念化できない機能として追求する。もしこれを普遍的概念構成として論理的に把握しようとするならば、實在世界に謎として存在する特殊的・個別的・非合理的なものを逸脱させることになる。むしろ非論理的的特殊性に関与するのが弁証法の仕事である。弁証法的事実に対して人間の執るべき態度は、前進・接近・順応である。これは認識論的に客體化の限界を拡大して、認識可能性の限界に接近するという在り方である。

弁証法的事実の認識は經驗によって可能である。この弁証法的經驗を具體的なものへと逆結合させるのは弁証法的意識である。これは認識範疇において意識に關係なく作用している。Zusammenschau・konsepative Schauに作用するものは、關係的・綜合的・統一的な機能である。しかしこれを統一要請に基づく人間の虚構へと拡大するのは、認識範疇のみを實在世界とする觀念論的思維に転落することになる。ハルトマンは認識範疇と存在範疇の結合——部分的一致——に、弁証法的思維の活動領域を発見している。逆結合によって弁証法的合理化的領域を拡大する努力は、正当な解決の試みである。

対立に独立性・否定性だけでなく、依存性・肯定性をも発見することが連続性の創造である。この場合の創造とは發明ではなく、あくまで発見でなければならない。實在世界にける統一的事實に即して分析される具體的部分を全体へと関連づけ、各部分の間に連続性を発見しそ

れを概念的に法則化したものが範疇法則である。従って範疇法則は各範疇の内的本質を取り扱うにあたって、何よりも實在世界の統一的凝集に即さねばならない。妥当法則・凝集法則・階層法則・依存法則はそれぞれ別の次元に属するものでなく、一貫せる共通な視点——弁証法——から解釈されるものである。解決されない二律背反を対立構造の基礎に置くのも、そこに統一の事實を認識し凝集の相違する型を開示するためである。従って横の凝集に存在するものが、そっくりそのまま縦の凝集にも妥当するわけではない。これまで各法則の中に依存と独立が存在することを論証してきたが、これも各法則によってそれぞれ相違する凝集の型があることを明示したいがためである。

依存と独立が二律背反の本質構造を示すことを繰り返し本論文で主張してきたのは、これらの統一へと凝集する事實が存在するからである。人間はこの代表的実例である。人間とは何かに關する古來の哲學的論争は、靈肉二元論をいかに統一づけるかに集中している。両者の依存性を理解しないで、一方が他方を支配・抑制することで解決の糸口を見出すのは、實在構造に存する統一の事實に即応しないことになる。両者の共存の統一が存在するのは實在世界の真実である。そこで認識論的に、下から上への部分的再現によって、下が上に部分的に包含され統一される事實を発見する。問題は、上に依存しないで独立する低次元の領域が、人間の意識構造に存在することである。

「人間は精神である」だけでは言い尽くされないものがある。⁽²⁸⁾なるほど精神の理解は階層法則・依存法則によって可能となるが、人間の

意識構造は精神のみでは一面的解明となる。意識の基底にあって精神と無関係に独立する肉体的なもの——欲望——が存在する。ここにおいても相変わらず二元論が出現する。下は上に依存しないで強くて独立である。これが縦の対立包含の障害となる重大な要因であるが、しかし下も基礎的範疇に依存して独立であることにおいて上と変化はない。確かにこれだけでは上下の直接的依存関係が理解できない。従って低次元の欲望が精神と分離して発動し現代社会に道德的混乱を惹起している事態に、全く対処できなくなってしまう。実在世界の弁証法的理解にとって一番大切なことは、独立性が存するためには依存性の成立が必要条件であるということである。そこで下が上に依存して下の独立性が保持できるという事実の発見が、ハルトマンの範疇法則における今後の課題となる。

結

人間は精神にならなければならない。それには意識の下部にあって強く独立している欲望を制御する必要がある。欲望の独立性が保障されるためには、依存性の理解が大切なことを自覚させねばならない。これが基礎的範疇に依存する意味である。もちろん上に依存すれば上は下に無関心ではいられなくなり、下に内政干渉して下の独立を阻害する懸念も発生してくる。しかし上部形成の自由は下の無関心に支えられているから、相互独立性保持のためにも相互の無関与的態度は必要条件であるし、また相互干渉は相互依存の事態まで喪失せしめるも

のであることを知らねばならない。

上に依存するためには、下の独立を保護する必要がある。下が自由・独立であって、下は上に依存することができる、欲望が精神に依存するとは欲望の独立を保護して、精神の原理に服従することである。範疇法則で規定する精神の原理とは、欲望と完全に分離したものではなく、欲望の質料化によって欲望が弱められ変化して精神構造の一要素となっているものである。すなわち人間の意識構造における統一は欲望の質料化であり、所謂、精神化である。これが精神になるという基本的解釈である。

実在的にも人間は精神的・人格的存在である。しかも四層の統一・凝集体として生きている事実は否定できない。確かに人間はものでもあり、植物でも動物でもある。しかし人間はそれらの凝集体であるとの理解は、それらの質料化によって成立していることが基本である。

人間は動物でもあるというのは、人間が動物そのものであるという意味ではなく、動物の再現による質料化が人間と動物を同一化しているということである。

ハルトマンの階層理論にある弁証法を理論的に解明することは至難の業であるが、現実人間が凝集体として存在する事実が何よりも人間の弁証法的存在を証明している。それが横のものであるか縦のものであるかの識別は困難であるとはいえ、ハルトマンの階層法則に凝集再現の上昇的繰り返しがあることは、横も縦も区別なく凝集⁽²⁹⁾していることの証拠である。従って範疇の凝集は無方向(Richtungslos)となり、

すべての方向に関連の道が開けてあり、⁽³⁰⁾ allseitige Kohärenz が可能となる。これは横だけでなく縦の関連においても、すべてをすべてと結びつけるという表示である。水平線と垂直線の交点として、凝集と再現を統一しているのが錯綜である。ここで重要なことは凝集と再現とを分離しないことである。再現も凝集の一機能である。視覚的に再現の事実を指摘できても、どうしても上の中に下が再現して凝集してあるのが説明できない。再現してあるものは既に凝集してあるものである。このように再現と凝集は決して別物ではなく一体である。

弁証法はハルトマンにとって何であるのか。弁証法を排除してはハルトマン哲学が無になる程、その弁証法理解は重大であることが判明している。非合理的なもの、未知のもの、謎に関するものの存在は、弁証法の成立を確実なものにする。弁証法とは解決のための方法ではなく、解決できない事実を示唆するものである。実在世界の基底に存するものは弁証法的構造であり、それは統一の事実を開示しこそすれ、よりよき解決へ何ら導くものではない。

註

- (1) New Wege der Ontologie (以下 NWO. と略) S. 29
- (2) NWO. S. 39
- (3) 「範疇法則による観念論批判」国士館 政経論叢・十七号
「範疇法則による唯物論批判」国士館 教養論集・創刊号・三号
- (4) 横の凝集だけに弁証法を認めて縦には認めない立場
- (5) Kleine Schriften (以下 KS. と略) II, Aristoteles und Hegel S.

226

- (9) KSI, Hegel und das Problem der Realdialektik S. 340
- (7) Der Aufbau der realen Welt (以下 AW. と略) S. 460
- (8) AW. S. 458
- (9) 水平的とは横の凝集規定ではあるが、この水平的意味は縦にも適用されるという含みがある。
- (10) 一義的に対立と包含を同一視すると、連続性の成立となる。従って対立と包含はあくまで分離・否定関係にあるものと考ええる。対立包含は否定的共存の意味である。

- (11) この疑問は下の質料再現による上の新規なもの統一にも妥当する。例えば生命発生の問題は世界における不思議の一つである。

- (12) Die Philosophie des deutschen Idealismus S. 401

- (13) AW. S. 223

- (14) AW. S. 327

- (15) 下は依存して独立でなく、上は依存しないで独立である。

- (16) AW. S. 255

- (17) AW. S. 203

- (18) 下から出発して上のどこへでも、限界はあるが関連づけができる。

- (19) AW. S. 426

- (20) 認識理由によって、具体的なものから範疇へ先験的に予想できるが(逆推理)、範疇から具体的なもの予想が不可能である。

- (21) AW. S. 245 原理から具体的なもの予想は存在理由、すなわち弁証法的理由によって可能となる。

- (22) AW. S. 459

- (23) KSI, Systematische Methode (以下 SM. と略) S. 29 Disjunktion

による原理の認識を行なう。

(24) AW. S. 597 Konjunktion による原理相互の弁証法的統一を推論する。

(25) SW. S. 51

(26) SW. S. 50

(27) 「弁証法は一切の哲學的思考に内在する」 SM. S. 48, AW. S. 593

(28) NWO. S. 40

(29) AW. S. 595

(30) AW. S. 460

(本学教授・倫理学)